

還暦過ぎて新たに得た喜び

鉛筆は、世代も国境も超える！

人生には、思いがけないことがある。六十歳を境に集めに集めた鉛筆で、ついに「えんぴつ1万本超えちゃいまし展」を開催するまでに至るとは——。この次第と鉛筆の魅力について、山台垣さんに聞いた。

鉛筆コレクター 山台垣

●やまだい・ひろし 1947年山口県生まれ。株式会社前夜通信社代表取締役社長。還暦を機にコレクションを始めた鉛筆で「えんぴつ1万本超えちゃいまし展」を開催中。

鉛筆が鉛筆を呼んで

鉛筆を集め始めたのはいまから八年前、ちょうど六十歳になったときです。

還暦という人生の節目を迎えてふと、幼いころを思い返したときのこと。夏休みに母の郷里へ帰省した際、私の鉛筆が小さくなっているのを見

つけた祖母が、一ダースの鉛筆を買

つてくれた記憶がよみがえってきたんです。コーリン鉛筆という、独特な顔がロゴになっている鉛筆だったんですが、このことを思い出したら、「あのコーリン鉛筆はいま、どうなっているんだろう」と、妙に気になりました。それを実際、ネットオークションで買ってみたのが、コレクションを始めたそもそものきっかけです。

っかけです。

一ダースもの鉛筆が手に入るのは、当時としては例外中の例外でした。昭和二十二年に生まれて、ものない時代に育っていますから、衣服や文房具が十分に買い与えられることなどまずなかった。鉛筆なんかはその最たるもので、足りなくなると家が薬局の友達のところへ遊びに行つて、帰りに薬を買うともらえるノベ

ルティの鉛筆を一、二本、もらっていたんです。ですから、子供のころに使っていたのは、そのほとんどが薬のおまけについでくる鉛筆で、薬局の友達は、鉛筆をもらうために作った友人でもあったわけです(笑)。そうして手に入れた貴重な鉛筆は、補助軸を使うなどして、最後まで、

大切に使いました。そんなこともあ

って、鉛筆にはちょっととした思い入れがあったんですけど、ビルの一室を使って一万本以上のコレクションを展示するようになるほど鉛筆を集めてしまったのは、元が根っからの仕事人間だったからでしょうね。

私は競馬新聞を作っている会社の三代目です。競馬は土日にありますし、人様が休みの祭日も仕事が多く、お正月さえ休むことがほとんどない。それでも自分の仕事に心底好きで、還暦まではわき目も振らずに仕事ばかりしてきました。

しかし、六十になったら、それもそろそろいいだろうと。いまでも現役ではあるんですが、そこまでがむしゃらになることはないと思うようになったんです。

ところが、仕事と距離を置くというのは、どこか寂しい部分もあるん

ですね。

そこへきて鉛筆に興味をわいたと思つたら、あつという間に収集に火がついた。仕事にしか興味のない目に、鉛筆を集める面白さがどんどん見えるようになってきて、鉛筆が鉛筆を呼ぶようになったとでもいうんでしょうか。小さいころに一時、切手や古銭などを集めていたんですけど、そういうこと以外にあまり娯楽がなかった時代に幼少期を過ごしているせいかな、知らぬ間に、ちょっとした収集癖が身についていたのかもしれません。

収集した鉛筆はいまも、常設展示しています。全部で一万本ちょっとあるんですが、自宅にはさらに一万本はあるはず。全部で二万本以上の鉛筆……、ギネスに申請したらおそらく登録されるんじゃないでしょうか(笑)。



三角の奇妙な顔がロゴのコーリン鉛筆。写真は品物を包むのに使われていた風呂敷